

国際社会学部

宮田敏之

Toshiyuki Miyata

地域社会研究コース／東南アジア地域タイ
社会経済史学・地域研究



「モノ」から考える地域研究

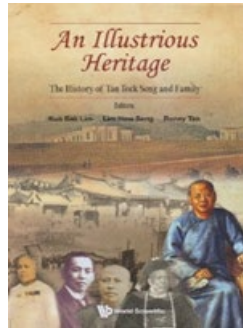
経済の発展を学びたいと思い、経済発展論、開発経済学、世界システム論、内発的発展論を大学院で学びました。しかし、理論研究よりも、歴史や現地調査を通じて、経済の発展を研究したいと思うようになりました。そこで、もともと関心を持っていた東南アジア、中でも1990年代初頭、著しい経済発展を見せていたタイの経済の発展のあり方を研究しようと考えました。タイ経済の歴史といえば、まず思い浮かぶのがコメでしたので、タイ米に関わる経済発展とその歴史を研究することになりました。こうした研究を進めるにあたり、社会経済史学の分野で議論されていたアジア間貿易やアジア間競争に関する研究に大きな刺激を受けました。同時に、タイのコメを研究するには、タイという地域の経済のみならず、歴史、政治、文化、農業を広く、かつ、深く学ぶ必要を感じました。日本には、石井米雄先生や末廣昭先生に代表される、タイを対象にした、実証的な地域研究の歴史があり、タイ語を駆使しながら、その地域を深く学ぶという先達の研究にあこがれを抱き、地域研究の道に進みました。社会経済史学と地域研究の融合を通じ、「モノ」から考える地域研究という研究のスタイルが徐々に固まってきたと思います。

【参考資料】 東京外国語大学HP「研究室を訪ねてみよう：地域研究は人間教育：宮田敏之教授インタビュー」<https://wp.tufs.ac.jp/tufstoday/research/22070701/>

研究紹介



19世紀後半から20世紀前半のタイ米輸出の発展をビルマ米やベトナム米との比較の中で検証しました。



シンガポールとタイのコメ貿易の発展を、シンガポール福建系華僑・陳金鐘 (Tan Kim Ching) のライスビジネスに焦点をあてて検証しました。



沖縄の伝統的な蒸留酒・泡盛が、20世紀前半以降、どのようにしてタイ米を原料とするようになったのかを歴史的に検証しました。



高級香り米として世界的に有名なジャスミン・ライスが、1950年代以降、どのようにして「発見」され、タイ国内で栽培が拡大するようになったかを検証しました。

担当授業

- タイ語文法、タイ語講読
- タイ研究入門
- 概論・地域社会と経済生活
- 現代東南アジア経済論
- タイ研究特論・タイ政治経済論
- 東南アジア経済演習・タイ研究演習

関連する分野

- アジア経済史
- 農業経済
- 放送産業史

出版物

- *An Illustrious Heritage: The History of Tan Tock Seng Family*
- 『「大分岐」を超えて：アジアからみた19世紀論再考』
- 『冷戦変容期の国際開発援助とアジア』
- 『アジア経済史研究入門』
- 『タイを知るための72章』
- 『東南アジアを知るための50章』
- 『島嶼沖繩の内発的発展』
- *Intra-Asian Trade and the World Market*
- 『岩波講座東南アジア史 第6巻植民地経済の繁栄と凋落』

国際社会学部

東南アジア経済ゼミ

タイ地域研究ゼミ



富山県で有畜複合循環型農業に取り組む「土遊野」でのゼミ合宿：稲刈り実習（2009年9月）

どのようなゼミか？

二つのコースに分けてゼミを行います。ゼミ生は、(A) 東南アジア経済研究と (B) タイ地域研究のどちらかに所属して学びます。双方のコースで学んでもかまいません。

(A) 東南アジア経済研究

東南アジア経済の発展について、19世紀後半から現代に至る、工業化の進展、貿易構造の変化、産業の変化、企業・企業家の歴史的発展や農業経済の変容などを幅広く学びます。日本語や英語の文献・資料を輪読します。現代東南アジアの経済動向については、『日本経済新聞』あるいはEconomistの記事を受講生が発表し、情報を共有し、ゼミの中で議論します。

(B) タイ地域研究

タイの歴史・政治・経済・社会に関わる代表的なタイ語・英語・日本語の文献・資料を輪読しながら、タイの社会について議論し、タイという地域について深く学びます。また、タイという地域を「プラットフォーム」にしながら、様々な関心・専門性を持つ教員・研究者・学生が集って、様々な角度から地域を分析し、議論し、情報を共有することを目的とします。

卒論

- カンボジアにおける米輸出産業の課題と展望—アムル・ライス社を事例に—
- ミャンマーにおける日系企業の動向—スズキを事例に—
- ベトナムで活躍する日本人スタートアップ—Pizza 4 P'sを事例に—
- タイの水産業における外国人労働者とサステナビリティに関する—考察—タイ・ユニオン・グループを事例に—
- タイの製陶業に関する—考察—栽培・収穫段階を中心に—
- タイの映画館産業に関する—考察—メジャー・シネプレックスを中心に—
- タイの乳製品産業の発展と日系食品メーカーのタイ進出—CP Meiji社を事例に—
- ミャンマーにおける日系企業の進出とその課題—ティラワ経済特区を中心に—

おススメの本

- 加納啓良編『岩波講座 東南アジア史6 植民地経済の繁栄と凋落』岩波書店、2001年。
- 末廣昭『キャッチアップ型工業化論—アジア経済の軌跡と展望—』名古屋大学出版会、2000年。
- 末廣昭『ファミリービジネス論—後発工業化の担い手—』名古屋大学出版会、2006年。
- 末廣昭『新興アジア経済論：キャッチアップを超えて』岩波書店、2014年
- 飯島明子・小泉順子編『世界歴史大系タイ史』山川出版社、2020年。

☆地域社会研究コース 宮田ゼミ紹介（2022年度ゼミ長・野口亜依）

「モノから社会を見つめる」、この考えに惹かれて私は宮田ゼミに入りました。多様な文化や歴史の中で、独自の発展を遂げた東南アジアを紐解くため、宮田ゼミでは自分なりの「切り口」を大切にしています。例えば、カンボジアの伝統絹織物が世界で注目される実態を調べたり、日本の乳製品メーカーがタイで成功した背景を調べたり、他にもタイの映画産業やミャンマーの自動車産業などゼミ生の専攻と興味は様々です。ゼミでは、お互いの問題関心を大切に、文献収集、分析、論文執筆方法を学び、意見交換します。多様な地域・テーマを扱う中で、徐々に「問いを見つける力」や「地域に根差す視点・社会を俯瞰する視点」が身についたように思います。ゼミは和気あいあいとした温かい雰囲気、先生は一人ひとりの話にじっくり耳を傾けてくださいます。自分の興味を深掘したい、初歩から経済を考える力を養いたい、地域を通じて国際社会を俯瞰したい、そんな方にお勧めのゼミです！